礫陵新聞

編集・発行
若松高校新聞部
北九州市若松区上原町15-13
TEL (093) 751-1911
印刷所
(有)秀文社印刷(883)1234

生徒会役員再任

"挑戦"

生徒会長　松田年正

今回で"四度目の挑戦"ということになります。

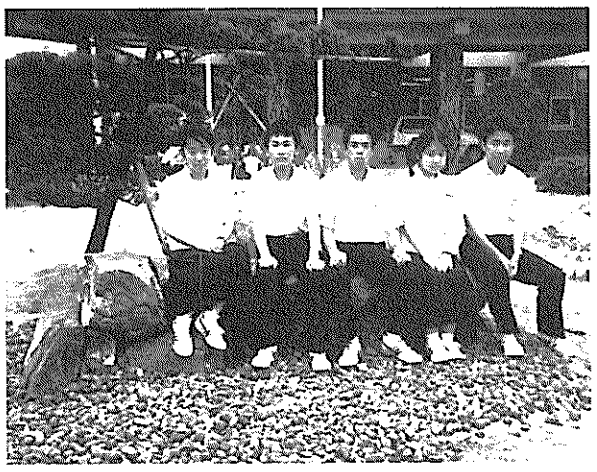
現在の心境は「また頑張るか」ってところです。実際、今回の改選では立候補者がいないという異常事態が起きてしまいました。そこで本田(孝)先生と曽根先生に頼まれて今回このような結果となってしまいました。

ここで六十二年度後期生徒会役員を紹介します。

＊会　長
二年三組　松田　年正
＊副会長
二年三組　井上　都
＊会　計
二年四組　杉岡奈津子
＊書　記
一年二組　野口　俊彦
一年七組　後藤　哲王
以上五名です。できるだけ多く生徒会としても会議やミーティングを開き、皆さんからの要望を検討、そして実行できるように頑張りたいと思います。

"再出発"という新しい心意気の下、半年間という短い期間ですがよろしくお願い致します。

＊＊＊



生徒会役員

尾瀬で学んだこと

教頭　川原茂敏

朝、職員室を出て南棟校舎・本館・北棟校舎をまわる。澄み切った空気のなかで、ゴミ一つ落ちていない光る廊下を歩くと、掃除をしてくれた生徒達の心意気を感じて、さわやかな気が漲ってくる。反対に、ガムや菓子やパンの袋が落ちていると、なんとなく心が落ちち込んで、「一体、掃除はどうなっているのだ」と思ってみたり、「散らかしたのは誰だ。」と腹立たしい気持が走る。

最近、通りを歩いていると、煙草のすいがらやジュースのあき缶がいたる所で目につく。「あき缶を捨てないで下さい。」と標示してあるグリーンベルトにも、あき缶が無造作に転がっている。道路に面した人家も同じ被害を受けている。「捨てている人は、他人の迷惑なんか考えないのだろうか。」と思う。

ともかく、ものを平気で捨てて悪びれた様子もない風潮が、社会に流れていて「ものを散らかさない。散らかせば、すぐに片付ける。」という基本的な生活習慣が失われているのは、大変残念なことである。

「ものを散らかさない」といえば、私は貴重な経験をしたことがある。かなり前のことになるが、湿原で有名な尾瀬ヶ原を訪ずれた時のことである。尾瀬の澄み切った水流、いろとりどりの水苔、水芭蕉(八月だから白い花は咲いていなかった。)の群生、風にゆれる色鮮やかな日光キスゲ。その中を往路・復路の坂の歩道が続く素晴らしい自然に圧倒されたのは勿論のことである。

でも、もう一つ心に残ったことがある。それは、私が歩いたところで、紙屑一つ落ちていなかったことである。ゴミで汚染されない自然が保たれていたことである。実のところ、私はパンの袋とジュースのあき缶の処理に困って、捨て場を探したのだが、捨て場はどこにもなかった。特に気付いたことは、ゴミ箱が一つも備えられていないということであった。尾瀬の自然に接すると、「持って来たものは、全て持って帰れ。」と教えられているようで、結局パンの袋とジュースのあき缶は持って帰った。

毎年、尾瀬を訪ずれる人達は何万とも何十万とも言われている。その一人一人が、私と同じ体験をするのではあるまいか。一人一人が、「持って来たものは、全て持って帰れ。」と心に受け止め、そのことを守るから、尾瀬という世界に誇れる素晴らしい財産が、りっぱに保存されているのではないかと思う。

このことは、学校にとっても同じことではないだろうか。教室や廊下や校庭が美しく保たれているということは、学校の教育方針や努力目標が徹底しているということであり、そこで生活している生徒達の考えや生活習慣がりっぱに生きているということである。

「ものを散らかさない。散らかせば、すぐに片付ける。」とは、人が身につけなければならない最も基本的生活習慣である。このことは、周囲に対する温い思いやりの心であり、生活におけるルールをきちんと守る意志でもある。またこのことは、少し飛躍した言い方になるかも知れないが、人が自分を正しく自己発展をさせるための不可欠の要素であり、豊かで明るい社会づくりの基礎となるものだと思うのだが。

私は、あしたの朝も、ゴミ一つ落ちていない光る廊下を歩くことができて、きれいに掃除をしてくれた生徒達のことを思い浮べながら、私も頑張ることができれば、この上なく嬉しいことだと思う。

放送部

九州大会出場
二年四組　若田さん

十月十八日(日)に若松商業高校で行われたNHK放送コンクール北九州大会で、二年四組若田順子さん(アナウンス部門)、二年五組今村里佳さん(アナウンス部門)、下川千恵さん(朗読部門)が入賞し、三名が県大会の出場権を獲得しました。

十一月に福岡市で行われた県大会では、若田順子さんが入賞し、九州大会の出場権を獲得しました。

そして、十二月十一日(十三日(日)の両日、佐賀県嬉野町で行われた九州大会には若田さんが出場しました。福岡県代表12名の一員として、九州各県代表とアナウンス部門で競い合いましたが、惜しくも入賞を逃がしました。

これからも練習を積んで県大会・九州大会・全国大会制覇を目標に頑張って下さい。

祝御結婚

去る七月十九日(日)に本田孝二先生(二年八組担任・社会科)、九月二十六日(土)に日高寛明先生(二年六組担任・理科)、そして十一月二十二日(日)に前田薫先生(二年七組担任・体育科)がそれぞれ御結婚なさいました。

いつも明るく、笑いのこぼれる家庭を作っていただきたいと思います。

本当におめでとうございます。末長くお幸せに！

♥　♥

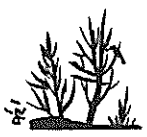
編集係より

生徒会の役員の再任は、生徒が「生徒会」という組織についていかに無関心であるかということを、はっきりと示した事であったと思う。

もちろん生徒の考えもわかる。なぜなら僕も生徒の一人だからである。しかしだれかするだろうという考えでは、どうしようもない、ということははっきりとしている。

次回の選挙は、今回のようにならないことを願うばかりである。

〈編集長〉



道

二年五組　杉山貴子

この道を通らなくなって
どのくらいたつだろう。
隠れるように咲いている花。
今にも泣き出しそうな
古びたガードレール。
子供達が帰って行き
やれやれと顔をしかめている
白い校舎。
彼らをささえている道に
なつかしさを覚える。

道は、何を知っているだろうか。
いつきても道は、相かわらず
黙りこくったままで
変わっていない。
私だけが、変わったのだろうか。

今の私に
道は気付いてくれるだろうか。
気付いてくれたなら
黙って
これからを見守ってほしい。
楽しかったあの頃を
永遠の思い出にするために。
私が、振りかえらず
前に向かって
踏みしめてゆくために。

礫陵言

最近、学校や家庭の中で、従順な子どもが増えてきていることをよく耳にするが、これには精神的自立の遅れを意味している場合が多いのであって、従順であることをすべて喜ぶべきとは言えないだろう。

ここで、高校生であるみなさんに「しつけ」の意味を考えてもらうなどというと、何と幼ない、奇妙な事を言う、と言われそうであるが、子どもであれ、大人であれ、たえず身近かな事に対する生活習慣の確立はすべての生活の基本になると思うがどうであろうか。

ある学校で、無遅刻・無欠席の運動に生徒、教職員が一体となってとり組み、成果を挙げたと聞いたが、もともとそうした生活習慣は、幼児から小学校の低学年にかけて身につけさせるのが通例なのである。

しかし、高校生になっても朝、男子の四割、女子の三割が親に起こしてもらう生活があるという調査データが発表されたのでは、これは驚きである。

朝起きに限らず、一事が万事現実問題として、身のまわりのことが自分でできず、高校生が親に頼りきった感じで家庭での生活を過ごしているのである。

このように、高校生たちは物質面は無論のこと、精神面でも親に指示してもらい、そのとおり行動する生活が中心なので、自分の判断で、あるいは自分の責任で行動する習慣が身につかない。即ち、自主性がなく、自立が遅れている。

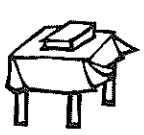
学校の始業時間に遅れないよう登校する、無断欠席や早退はしない、あいさつをしよう、等々は文字通り、人間として最も基本的な生活習慣であり、これを守ることはそれほど窮屈な事ではないと思うのであるが、そうした常識が崩れ始めていることは誠に遺憾である。

ところで最近、学校の中で一寸した異変が起こっている。と言ってもそれはうれしい異変であるのだが、昼休みや、放課後に教科授業でわからない部分を早速に質問してくる生徒が以前にも増して多数になったことである。今年四月、青年教師の赴任で職員室が活気に満ちた雰囲気になったこともあるが、生徒諸君が教科書、ノート、プリントを持って職員室にやって来、熱心に先生の指導を受けている姿は、「これぞあるべき姿の学校」といった感じがしてならない。頼もしい姿でもある。

どのような事でも、「わかればおもしろい」し、「できれば楽しい」のが人間の本性である。そして学校における「わかった喜び」は次の難しさに挑戦するすばらしいステップとなる。

そして、生徒のみなさんの反応に応じて授業の展開を時には修正しながら、「わかる授業」をどうつくってゆくかが教師の課題でもある。

また、一つでもわかったという気持を抱かせる授業でありたいと思うのが教師の願いでもある。そのような教師の努力と生徒諸君の予習・復習の習慣化が一体となってこそ、学習の効果も上がり、学習意欲あふれる充実した学園生活が送れるに相違ないと思う。



ホームステイを終えて

二年一組　満村由紀

私は今年の夏休みをカリフォルニアで過ごした。

私がホームステイすることになった家族は、リンダ・ハーバート・キャロルさん一家で、四人家族。場所は、ハークムーンベイより十二マイル先のモンタラという美しい所だった。

七月三十日、「グッドモーニング!!」で起こされた。朝食は、コーンフレークとオレンジジュースだった。自分で昼食のサンドウィッチを作り、リンダさんの車でコースセンターへ。午前九時、アメリカでの過ごし方についてのオリエンテーション。午前十一時三十分、25¢のワンマンバスに乗ってサンマテオ大学へ。昼食を食べて大学を見学した後、テニス、バスケットボールなどのスポーツをした。午後三時、カリフォルニアインディアンの博物館へ行った。帰りのバスを待つ間、雲一つない真っ青な空を見ながら芝生に寝ころがった。とても気持ちが良かった。

八月一日、ホストファミリーと、サンフランシスコへショッピング。サンフランシスコの街は、とても坂が多く、多くの人種の人々でにぎわっていた。あのケーブルカーにもぶらさがって乗り、チャイナタウンでは3ドルの靴を買った。サンフランシスコの有名なレストランで昼食を食べた後、アメリカで有名なブランドのブティックへ行った。リンダさんは、高すぎてここでは買わないと言ったが、私にとってここの服は、買わなければ損と思うくらいに安かった。試着室はカーテンなし。日本人なら恥ずかしがるけど、こっちの人はみんなオープン。アメリカの人達は人の目を気にしないし、人を気にしない。うらやましく感じられた。フランス人のおじさんに、似顔絵を描いてもらった。慣れた手つきで描き上げた絵は、あまり似てなかった。夕食は、家の裏のテラスでバーベキュー。この日、私のためにご飯を炊いてくれた。夜遅くまで、リサさんと色々な事を話した。リサさんのボーイフレンドの事、将来の事、女の子の友達の事など…。

八月四日、コースセンターにハーフムーンベイの町長、ブライアン・ビールさんが来て下さった。その時、私達全員にかぼちゃの絵のついたかわいいピンをくださり、私達がここに来たことを、大変歓迎してくださった。午後一時三十分、パシフィカでボウリング、アメリカでも私は下手だった。夜は、リンダさんの家でメキシカンパーティー。家の中は、何家族も招待されていて、とてもにぎやか。メキシコ料理を食べ、メキシコのゲームなどで遊んだ。大人たちも、子供のようにはしゃいでいた。私はこの時、日本から持ってきていた浴衣を着て、パーティーに出た。すると、アメリカの人たちは大喜び。「ジャパニーズドレス・イズ・プリティ!」と言って、写真を撮ったりしていた。この日は、浴衣が一番モテた。

八月七日、エルカス牧場へピクニック。この牧場は海岸沿いにあり、気が遠くなるほど広い所だった。私達は、一時間9ドルで乗馬をした。私が乗った馬は、ウィーノという馬で、とてもものんびりした馬だった。私は一番に出発して、海岸線をゆっくり歩いていると、友達が、ドドッーと後ろから走って行って、あっという間に最後になってしまった。ウィーノは、最後までマイペースでゆっくりと歩き、寄り道をたくさんして、私が帰って来た時はとっくにみんなは着いていたらしく、とり残されていた私を待っていてくれた。「馬は、乗った人の性格が出るのだろう。」と友達に、言われてしまった。

八月十九日午後五時三十分、JAL福岡行き383便に搭乗した。出発時刻が少し遅れ、福岡に着くのは午後八時過ぎらしかった。私の時計は八月十九日の午前二時、眠たくてたまらなかった。みんな目が充血していた。飛行機の中では眠っていて、目が覚めたときにはもう福岡上空に来ていた。福岡国際空港へ着陸、自分の荷物を持ってロビーへ歩いて行った。ロビーには、大勢の出迎えに来てくれた人が、首を長くして待っていた。その中に私を必死に探している両親の顔が見えた。この時、本当に日本に帰ってきたということを実感した。

ワシントンDCを旅して

二年十組　桧貴子

七月十九日、私達（母・妹・私）三人で、この日からアメリカを目的として日本を約二十日間離れた。

まず、韓国のソウルまで行き、ロサンゼルスへと向かった。私達が実際に目的としていた所は、ロサンゼルス（西海岸）ではなく、フィラデルフィア（東海岸）だった。

合衆国内で西海岸から東海岸へ行くのに飛行機で時差を含めて約九時間程乗った。西海岸と東海岸とでは約三時間もの時差がある。一つの国でこんなに時差があるのには驚いた。

七月二十日、午後四時三十分、フィラデルフィア空港に着いた。そこでも知り合いの人が、親戚などと一緒に迎えに来てくれていた。やっと会えたという事で、緊張がほぐれた…と思った途端に疲れがどっと出てきた。しかし、家族三人でよく、こんな所までこれたものだなあーと今つくづく感じている。この日はホテルで夕食を終え、すぐに床に着いた。

アメリカは、日本に比べてとても物価が安く、私達にとってはとてもLUCKYな事だった。例えばホテル代を例にとってみれば、日本で一泊したら大人一人七千円位だが、アメリカでは一部屋（ダブルベット二つ付）で、その中で何人泊まっても50$位（日本円で約七千五百円）だった。

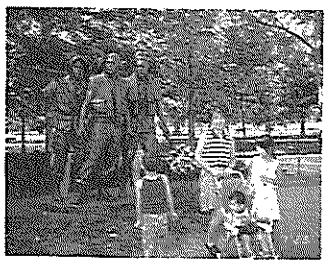
七月二十二日、ワシントンへ出発。ホテルよりフィラデルフィア空港までバスに乗った。同行者は知人のハンクさん一家（四人）とハンクさんの母親と私達の合計八人で二泊三日の旅に出発した。

午前十時五十九分、アメリカンエアープレインの十八人乗り小型機でワシントンへ飛び立った。

アメリカ合衆国の首都、ワシントンDCに到着した。

私は知らなかったけれど、アメリカ合衆国には二つのワシントンがあると聞いた。その二つを区別するのに首都の方にはワシントンの下にDCがついているそうだ。

翌日七月二十三日、朝食を食べ終えた後、待ちに待っていたDC観光。まず第一に行った所は、ベトナム戦争で亡くなった人の名前が刻まれた所で、何千人もの名前がそこにあり像が残っていた。一緒に行ったハンクさんは、以前ベトナム戦争に出兵して、幸いにも生き残って帰って来た。刻まれた何千もの名前のうちハンクさんは何人かは友達だといって懐かしそうだった。



その次に見学に行ったのが、ニュースなどでよく見る大統領官邸であるホワイトハウスで、始めは外から眺めた。柵をした向こう約100m位に、純白で堂々と建っていた。柵から100m位の間には、緑と水色と紅色が調和していた。緑は芝生と植え込みの色、水色は中央に透んで輝いていた池の水の色、紅色は芝生の間に正しい間隔をとってかわいらしい花を咲かせていたその花の色、その配色と迫力に私達は負けて、ただ「スゴーイ」「スゴーイ」と感嘆するばかりでした。ハウスを囲むように、ケネディ墓地と同じように警備員が見張っていた。そこは、たくさんの観光客で賑わって、歩くことさえ満足にできなかった。ホワイトハウスを見れただけで十分満足だった上に、ハウス内に入って見学が出来るという事を聞いてとても興奮した。私達と同じような人がたくさんいて、ハウス内に入るまで大きな列を作って待っていた。やっと順番が来たかと思うと、入る前に荷物チェックやボディチェックを受けた。それが終わると、待ちに待った本当のハウス内。白を基調に落ち着いた作り、ハウス内はいくつかの大きな部屋があり、それらはレッドルーム、イエロールームとかいう感じで色によって部屋が分かれていた。その中の一つイエロールームでは、週に一回、レーガン大統領がそこで会見などをするとか…。それに中曽根首相と会談したりとか…。とにかく内部はとても美しく、清潔感が漂っていた。こういう所に来た私達は、本当にアメリカに来たなあと実感した。

こうして私達は二十日間のアメリカ旅行を無事に楽しんだ。

この二十日間という長い滞在期間の貴重な体験はこれからの人生に応用していきたい。アメリカ人の他人への寛大な接し方、心の広さは私達にも必要だと思う。

最後に、もっともっと英会話を勉強して、次に行く時は色々な所で誰とでも話せるようになりたい。

突撃レポート Vol.2

【運動部編】卓球部

体育部は前回の女子に続き、今回は男子卓球部を紹介します。部長の二年二組後明慎太郎君、一年九組の後藤陽次郎君にインタビュー。

Q1　部の雰囲気を教えて下さい。

A1　暗くはありません。

Q2　部員数は何名ですか。

A2　現在十二名です。

Q3　最近の戦績はどうですか。

A3　ぼろ負けです…（笑）。

Q4　これから部をどのように発展させていきますか。

A4　これ以上の発展はまずないでしょう（笑）。

Q5　では最後に部長さんより一言。

A5　（本当に一言）マネージャーを募集中です!!

インタビューは練習の真っ最中でしたが、冗談を交えながらの楽しいインタビューでした。戦績の方も「ぼろ負け」が「ぼろ勝ち」になるように頑張って下さい。

【文化部編】放送部

今回の文化部は、放送部を紹介します。二年四組の若田順子さんと二年五組の今村里佳さんにインタビューしました。

Q1　部の感じはどうですか。

A1　喋ることを主としているだけに明るいです（笑）。

Q2　現在の部員数は。

A2　一年は女子が二名、二年は男子が四名、女子が三名の計九名です。

Q3　顧問の先生は。

A3　木村先生と石川先生です。

Q4　どういう活動をしていますか。

A4　お昼のミュージックリスト'87を始め、文化祭・体育祭その他の行事でも司会等を行う活動をしています。男子は主に集会の用意や機械作業をしています。

それと、グラウンドの運動部の皆さんには、御迷惑をおかけしていますが、毎日放課後、体育館横で発声練習をしています（笑）。

Q5　最近のコンテストの成績はどうでしょう。

A5　全国大会に出場した先輩には劣りますが、十一月に行われた県大会に三名、十二月の九州大会に一名出場しました。

Q6　部活をしていて楽しいことは何ですか。

A6　放課後の雑談を楽しむことです（笑）。

Q7　今後の目標は。

A7　とにかく部員を増やすこと、そして全員県大会に出場するようにがんばり、一人でも多く九州大会・全国大会に出場することを目標としています。

Q8　ところでよく聞かれるのですが、放送室はどこにあるのですか。

A8　職員室に入って左に行くとあります。でも狭いので七・八人しか入りません。

Q9　では最後に若高生に一言!!

A9　機械いじりが好きな男子の皆さん、お喋りの好きな女子の皆さん、経験の有無を問わず部員募集中です。

来年の県大会・九州大会・全国大会に向かってあなたもチャレンジしてみませんか？

行事表

62年
12・1～5　期末考査
12・18～23　保護者との懇談会
12・24　終業式・転入考査
12・25～28　冬期課外・補講
63年
1・4～6　冬期課外（三年）
1・6～7　追試
1・8　始業式
1・9～11　校内実力考査
1・12～　三学期課外
1・14　模試（一・二年）
1・20～27　補講（三年）
1・23～24　共通一次
1・27～30　寒稽古（一年）
1・29～2・3　期末考査（三年）

編集後記

りーだーず　るーむ

さあ、今年もあと一週間。この一年皆さんにとってはどのような一年だったでしょう。楽しかったなという人もいれば最低っ!!という人もいたと思います。ま、人それぞれ十人十色ですからね。

さて、今回の礫陵新聞いかがでしたか。急がなくてはと思いながら、いざというときには期末試験があるのでだーれも集まらない。その上、私が風邪で二日間ダウン…。結局、五日間で全て終わらせてしまうという非常事態に陥ってしまいました。

今回の編集作業で一番驚いたのは、満村さんと桧さんのレポート。それぞれ四百字詰め原稿用紙で何と三十六枚と十七枚!!紙面の都合で全てを掲載することはできませんでした。どうもスミマセン。

冬休みも長くて短い二週間。その間にクリスマスや正月がありますが、くれぐれも食べ過ぎでお腹をこわしたり、風邪をひいて始業式早々欠席なんてことにならないように気を付けて下さい。特に受験生の皆さんは注意して下さい。

では皆さん、楽しい冬休みをお送り下さい。では次号のこの場所で又お会いしましょう。それでは…。

written by ちゃりんこらいさあ